

エンダウ川流域の Orang Hulu (Jakun) の家族覚え書

前 田 成 文

1

Orang Hulu (オランフル) という呼称は彼ら自身が自分達をさして呼ぶ名前、その意味は、「川の上流あるいは奥地に住む民」ということである。生活の舞台となるのは、川と背後のジャングルとであり、時たまマレー人・中国人の町に出て行くこともある。エンダウ川は、巾広く、黄色味を帯びて蛇のように流れ、沢山の支流をもっている。豊富とは言えないが淡水魚、亀などをとることができる。そのうえ、川が重要な意味をもつのは、唯一の交通手段としてである。

背後のジャングルの彼らが居住し活動する地域は、原住民区域あるいは、原住民保存地区としてスルタンから与えられたものである。この区域に関しては、マレー人保存地区ではあり得ず、野生動植物の保護法も適用されず、売買、譲渡、貸付も自由にはできない。(v. *The Aboriginal Peoples Ordinance, 1954. Sec. 6 & 7.*) この与えられた土地を中心に彼らは伝統的な生活なり、近代文明に犯されて designated された生活なりを自由に送ることができるわけである。

経済活動は単に採集栽培のみにとどまらず、それらを買ったり、あるいは賃金労働者となって現金収入を得る。この点、エンダウ川流域の諸部落は、Padang Endau にあるエンダウの町の購買圏の中にあるともいえる。貨幣概念は彼らの中に相当浸透し、物をすべて貨幣によって計算するほどであるが、それはあくまでも消費面における貨幣使用のみであって、貨幣の生産的使用を彼らが理解しているとは思われない。

貨幣経済の浸透にもかかわらず、経済活動の中心となるのは夫婦である。彼らが賃金労働となっても、オランフルである限り、夫婦を構成しないものは一種のかたわ者のように見なされる。伝統的にジャングルでの生活が夫婦の協働ということを強制的に要求したからであろう。



2

夫婦 (laki, bini) は sekelamin と呼ばれ、同時に夫婦家族そのものを指示する。もちろん男が家族のことを “anak bini” と言っても良いわけであるが、マレー人の用いるヒンズー起源の “keluarga” は全然用いられない。kelamin という語は元来 pair という意味である。

laki, bini という以外の人間をカテゴリー化するのに以下のような語を用いる。

頼りになる労働力となり得ない年少者は、ngkénék と呼ばれ (ほぼ 12 才位まで)、一人前になりかけの青年を dara と称す。ngkénék であることは、すべての社会的機会に計算にいられないが、dara となると常に彼らの存在が考慮される。bujang というカテゴリーは、単身者、一人者を総じていう語であるが、暗に婚姻の可能性を持つ人間、悪くいえば社会に性的な害を及ぼし得る人間としてとらえられる。離婚によって配偶者のない女性は janda と呼ばれ、dara (betina) と違って社会的な規制を受けることが少ない。

結婚したものでもいろいろとわけられる。子供がみんな死んでしまったか、あるいは、子供の全然できない夫婦は mantai と呼ばれ、配偶者と子供とを失った者は balu である。この両語は、しかし、本人の呼びかけにも用いられ、時には名前が忘れられてこれらの語だけが通称として用いられることもある。ある女は、4 回結婚して 4 回とも主人を失い子供がないので balu と通称される。

婚姻は dara にとって必然的なものであり、ngkénék の段階を終えると配偶者をさがすことになる。一つの部落は、いわば “kompol saudara” (= gulongan saudara) といえるが、部落内婚も外婚もなく、配偶

者の選択が慣習的に強制されることもなく、きわめて自由である。しかし男の側から言えば、部落内に適当な相手がいればそれを選びたがる。それは、婚後の生活が一時的にしる妻方の家で送られ、部落部落は若干にしる生活事情が異なっているからである。しかし部落の構成が小は8家族から大は30家族という小規模さなので、実際には部落内婚は難しいと言える。

部落内の場合は、仲間集団の一員として案外た易く異性に近づき得るが、部落外の場合は、部落内ほど近寄るのは容易でない。

しかしたいがいの婚姻は、親類筋にあたる者の場合が多い。ここでは第一イトコ同志間でも婚姻し得る。婚姻を禁止されるのは、異世代間およびきょうだい間である。前者の例はそれでもないわけではないが、後者は、死をもって罰せられるという。

配偶者の決定は親 (ibu) が子供にこの者はどうかと問う場合と、子供の方が両親にこの者と結婚したいという場合共にあるが、親の一方的な押しつけは稀で、必ず子供の意志が尊重される。婚姻のイニシアティブは男側から取られる。男が自分のオジ (wah) にあたるものに交渉を依頼する。とくに父方、母方は意識されず血縁のオバ (amoi) の配偶者もオジと同一視される。狭い意味のオジがない場合は、親のイトコに当るものがその任にあたる。同じオジでもなるべく女側にも発言権を有するようなオジが好まれる。この男側の代表者 (wali) が娘の所に行き、娘側の wali に話をつけて、娘の親、娘自身の意向を問うわけである。この時に、結納についても決定される。

結納物、結納金は慣習によって各部落毎に決まっている。男が必ずそろえねばならないのは、指環、耳飾り、首飾り、シレ、ピナン、タバコ、衣服、髪すき、かみそり、鏡、口紅、白粉、髪油、であって、これらを1品ずつそろえるか (serba satu), 2, 3品 (serba dua, serba tiga) ずつそろえるかは娘側の意向による。この品物に、2.5ドル (M\$) ないしは2.30ドルまでの mas kawin が男側から女側に渡される。これらは娘の wali に渡されるわけであるが、結局はすべて娘の手に渡される。結納の式は、男側の wali が、娘側の wali にこの品物を渡して、その後でシレとピナンを食べ、タバコを吸って完了する。

結婚式は男側の準備が整うと、娘の家で行なわれる。式を中心となるのは、両者の水浴と bersanding と、

共食とである。時と場合とによってこの後か前に、集った人々全部に食物を出す宴が行なわれる (bekerja)。この宴のための費用 (belanja) は普通 100~200ドルで、男の責任で女側は1銭も出す必要はない。男自身で用意する場合、親縁のものが助けあう場合、広く部落の人から寄付によって集める場合などある。式の後にはバイオリンをひいて一晩中踊りをしたり、かけごとをして過ごす。形式上はこの夜両者は一緒に寝るわけであるが、簡素な家の構造、まわりの雰囲気などのため beginan にまでは至らないことが多いようである。しかし、“pantang”として、この夜から3日3晩は、両者は必ず向いあって寝、朝起きると2人そろって水浴し、御飯は一つ皿のものを2人で一緒に食べねばならない。また3日ないしは1週間は部落の外に出ることは許されない。

式の翌朝、すなわち両者の間で事が成立したと仮定される晩の次の朝、両者の親族および部落の長である Batin が集って berhadat と称して、金の支払・分配がなされる。上述の mas kawin もあらためて勘定され、これに加えて“hadat”の金、“timbang”の金が男側から女側に支払われる。前者は20ドル、これは娘側の wali の間ですべて分配され、後者は40ドル、これは娘の属す部落の Batin に対する金で、その分配は彼の一存による。(但し金額は一定でない。) この berhadat の後、新郎新婦 (pengantin) はそれぞれの親族の1人に手をとられて、相手側の親族1人1人に挨拶して回る。それから両方の親族一緒に食事をして、完全に結婚の手續は終る。結婚の届出などの法的な手續はなされない。

上述の手續は、しかしながら、オーソドックスなやり方であって、必ずしも結婚がこのような手續をふんでなされるとは限らない。両者の間で愛情が急速に進展して誰も知らないうちに性的交渉をもってしまうこともある。この場合は、娘側の wali が男を「捕えて」強制的に結婚させる。あるいは相思相愛で、娘の親が結婚に反対している場合など、男の方に勇気があれば、娘の家に忍びこんで一緒に寝て既成事実を作ってから、どうしても結婚させねばならぬようにしたりする。相思相愛の場合はこのようにいろいろ抜け道があって、男に十分の金がなくとも結婚はできるが、結婚の慣習法を破るわけであるから、罰金を課せられたり、婚後の生活において種々の規制を男が娘側の wali から受

けるのは当然である。

さらに容易なのは、娘が一度「手を濡らした」もの、即ち janda の場合で、多くは格別の手続を経ずに一緒になる。

それでも婚前の交渉は厳しく罰せられる。たとえば、DN 部落の男が JR 部落の女に、「エンダウの町で会った時結婚してもよいというあなたのことばであったが、その後何の返事もないのはどうしたのか。タバコ、白粉、口紅、ハンカチ等の品物を一緒に送るから、結婚するのか否か、すぐに返事の手紙を出してほしい」という手紙を送った。たまたま、この手紙が JR 部落の Batin の手に落ちた。そこで Batin は、部落に住むその男のオジを DN 部落に送って、その男ならびに DN 部落の Batin を呼んで、JR 部落で事件の裁判ということになった。

この時、女の方は上述のような約束をしたことを認めたにもかかわらず、Batin の法は厳しく、男がもし結婚したいのなら、法を破った罰やその他 Batin の timbang として結婚費用 200ドルを用意せよ。もしこの金が調達できぬのなら、部落に対し迷惑を与えた罰金として50ドル差し出すことを命令。男側は費用として100ドルしか用意していなかったため、結局50ドルの罰金を支払ってこの結婚は不成立に終わってしまった。この50ドルの半分は DN 部落の Batin に渡され、各々の金は関係者に分配されたという。この問題の女性は、先年、3ヵ月ほどの結婚生活の後、問題の男と一緒にいるために先夫（父方第1イトコ）を捨てたというのである。

この Batin の判決に対しては、不満をもちながらも多かったが、公然とした反対はなされなかった。それはこの判決がいちおう慣習法に基いたものであるからだという。

婚後の居住は一時的に妻の家で過ごすのが慣習ではあるが、妻の家の大きさ、夫の経済力、妻の親がどの程度婿の経済力労働力を要求するか、などによって、遅かれ早かれ、独立の家を持つことになる。たとえ長く2世代の家族が一つ屋根に住むことがあっても、かまどは別々のものを持ち、家計を別にするのが普通である。新居は必ずしも妻の部落とは限らず自由に選択し得る。



3

夫婦の間はきわめて平等であって、ことに家に関する事柄については、妻の意見が第1に問われねばならない。女の仕事は、水汲み、薪木集め、魚釣り、果実・野菜・タピオカ・とうもろこしの収穫、育児、家の内外の掃除、洗濯、パンダヌスのマット・バスケット作り、タバコの巻葉作り、男が切ってきたロタンの洗い仕事などで、後者の3つの仕事は、現金収入の道でもある。これに対して男は、ロタン切り、伐材、狩、家作り、網による魚取りなどの仕事をするわけである。ロタン切りの場合、奥地に入って長く仕事をする時は、必ず夫婦そろって仮小屋 (pondok) に住んで、共同作業をする。部落の近くでロタンを切る場合は、単身か、または2、3人1組になって男だけで行く。この時狩も同時になされることが多い。このパーティは、近い血縁地縁関係にあるものからなり、常に一定した構成を示すことが多い。

また財産の分配も男女の区別なしに均等分割が行なわれる。名前もマレー／アラブ式のように個人名の後に父親の名をつけて呼ぶ慣習も伝統的にはない。政府のセンサス、身分証明書などでは便宜上マレー人式に、A bin (binte) B というふうに書かれてはいる。夫婦はお互いの名前を直接呼びあう。

結婚が簡単であるように離婚も、一方が嫌になれば、それ相当の罰金(Batin の場合25ドル)を支払えば事が済み、両者とも嫌になると、あっさり別ればよいわけである。離婚したものに対する社会的な冷たい眼も存在せず、人々は離婚をごく軽く受けとる。再婚に際しても特にハンディキャップというものは考えられない。

このように夫婦の間柄は平等であって、時には uxorifocal な点をも感じさせるほどである。

乳児の養育に関しては、児に非常に甘く、こどもが泣けば乳を与え、こどもの思う通りに行動させ、排泄もまったく放任される。こどもに対して肉体的な罰をほどこすことはきわめて稀で、多くは説得・叱責・威嚇による教育がほどこされるだけである。6～8才位に

なると、何らかの仕事を手伝うことを期待され、いろいろな雑用の他に、女子は母親に男子は父親に従ってそれぞれの仕事を覚えてゆく。女子はこの時も男子より早く定期的な仕事を課せられる。弟妹の子守りとロタン洗いである。最初は子供の意志を尊重して仕事も連続的ではないが、10才をこえると、徐々に責任のある仕事を課せられる。その仕事を責任をもって果し得、1人前の人間と同程度の結果を得られるようになると、dara として認められる。dara となって真剣に結婚を考えだすと、自分自身の資金を親とは別に貯える例が多い。一緒に住みながら計算は完全に別という個人主義的な家族もある。dara の婚姻年齢が遅れば遅れるほどこの傾向は助長され自然と dara が独立していく。

こどもに対する愛情は父母ともに強く、養子の場合でも実子とかわりなく愛情をそそぐ。こどもも親に依頼心と信頼心を強くもつ。しかし親がこどもに老後の世話をみてくれることを期待するのは少なく、いくら年をとっても（男女とも）働きを止めてこどもの世話になるという例は知らない。

マレー人のように、こどもの長幼を特に指示することばはなく、きょうだいは性別に関係なく、年上の上ものは bah, 年下のものは adek と呼ばれる。adek が bah を呼びかけるときには、名前を用いるのに対し、bah が adek を呼ぶ時には、単に adek と呼ぶだけである。bah は常に adek の保護者として振舞うことを期待され、たとえ adek が自分ひとりで沢山の菓子を持っていても、それを取り上げるということはなく、adek の方から差し出してくれるのを待っている。きょうだいの間では、自分だけが獲得したものを分配する傾向はことに強い。



4

新しい夫婦家族が形成されると、姻族関係が生じる夫婦間の調整と共に、この姻族関係の調整が新夫婦に課せられるわけである。この新しい関係の conflicts を避ける意味で、関係者の間に、遠慮ないしは尊敬の態度が要求される。

配偶者の親は mentuha, こどもの配偶者は menantu と呼ばれ、両者とも名前を直接言うことは忌避される。mentuha は単に配偶者の実際の両親だけではなく、wah (=pak saudara), amoi (=mak saudara) にまで拡大され、同様のことは逆の場合にもいえる。mentuha-menantu 間に厳しい忌避関係はない。夫婦の両親間の関係は bisan と称されるが、特別な態度を要求されることはない。

配偶者のきょうだいは、ipar と称呼され、この ipar の名前も忌避される。mentuha-menantu 間同様、一般に使用される第2人称 hi を用いず、尊敬の意味のこもった aji が使われる。ipar の配偶者は biras と称されるが、biras 間にも特別な規制はない。ipar 関係も拡大解釈され、配偶者の血縁のイトコもすべて ipar とされる。

部落は、きょうだい・いとこ・親子・おじ・おい関係によって結ばれた夫婦家族の幾組かが中核となって形成される。来たるものはすべて受け入れるという open な社会なので、全然関係のないものでも部落に住めるわけであるが、夫婦とも部落内に1人の関係者もないという例はない。必ず夫婦の一方のきょうだい、いとこ、親、子、おじ(おぼ)、おい(めい)のいずれかが住んでいる。

そして、このエンダウ川流域の、LB, DN, MT, JR, TT, PN, PT の各部落の人間は、すべて adek-beradek であると彼らは意識し、他の川に住むオランフルとは一線を引く。しかしこのグループが内婚集団を形成することはなく、自由に他の川に住む部落の者とも通婚するので、個々の夫婦家族はエンダウ川以外にも広縁者を有している。例えば、カハン、スンブロン川に住むオランフルは特に JR, TT 部落の人と近い関係にあるものが多く、また MT, DN, LB は、アナ・エンダウ川の部落のものに近い。

部落は別にしても、一つの川に住んでいるということは、彼らにとって大きな意味をもち、川を違えることは社会を違えることに等しいほどである。しかし、同じ一つの川に住むものでも、部落毎の競争意識、ライバル意識は強く、部落を訪問すると必ず他の部落の悪口を聞かされるのが常である。いわく、家の配置がなっとらん、敷地が汚い、蚊が多い、Batin の身持ちが悪い、女がだらしない、金のためなら何でもする、等等。

実際に各部落の相違も見逃し難く、話し方、イントネーションを若干異にし、生活の仕方にも差異がある。

もっともエンダウの町に近い LB 部落では、上流の諸部落とははなはだ異なるイントネーションがあって、この部落だけは親族称呼も若干ことなる。LB からごく近くの DN 部落の人は、半分は LB のイントネーションで話しその親族称呼を用いる。ここでは中国人の材木業者の kongsi に働く中国人労働者、マレー人労働者、および定着したマレー人家族が住んでいて、他の部落には見られないことである。MT 部落は DN と共にパハン州側にあつて、ここに Jabatan Orang Asli のパハン州の役人が出張しており、学校、診療所が整備されて、各々マレー人の先生、K. L. から来た dresser が住んでいる。そのせいか、部落から受ける感じは、去勢された部落というところである。奥地の PT は新部落を作ってから5年ほどになるが、きちっとした家の配置、すべて同一の材料を使ったゆったりとした清潔な家、部落の集会所である balai、戸口にある魔よけの飾り、木器を使ってする伝統的な音楽などを有することで、他の部落とは別な感じを受ける。

各部落は、各々有能と認められた人間が、Batin に選ばれて、彼によって部落の在り方が決定されるわけであるが、彼の下にも、上にも役職を持つ者は存在しない。一つの川を結ぶ連盟のようなものも現在は無い。すべての事件は Batin によって裁決されるわけであるが、その裁決が独断に走ると、Batin の地位を追われたり、部落の者が他部落に移住してしまつたので、Batin は常に部落のものの意見をとり入れ、妥当な裁決をすることを強制される。



5

以上、フィールド・ノートから若干の事実を列挙してみた。家族・親族問題の予備知識となるものを提供

したかったのであるが、問題を直截に指摘するまでには至らなかった。

調査は8月から始まり、約1カ月間、都合により不在であった以外は、ずっと JR 部落に滞在し、この部落の人々と共に生活することによって資料を集めた。

調査の上での障害は何といつても言語であろう。彼らは程度の差はあつてもマレー語を話す。(例えば DN 部落の多くのものは、ほとんど完全なイントネーションでジョホール・マレー語を話すことができるのに対し、JR 部落の者の多くはイントネーションが奇妙である。) 彼らのことばが、マレー語の一方言である以上、マレー語を話すのは不思議でもなくそんなに困難でもないのであるが、マレー語との相違は単にイントネーションのみではなく、語い、語順においてもしばしば異なり、彼らが普通に話すとマレー人は理解できないほどである。

同じジャクン(オランフル)と称されるグループの中でも、きわめて地域的差異が大きく彼ら自身他の地域に行くとマレー語で用を足す有様である。

私は達者なマレー語を操る自信もないので、最初から彼らの方言に取りくんでいったわけである。しかし数カ月の滞在で、やっと慣れてきたという程度である。このようなことばの問題もあつて、前半は observation と、こちらからの誘導ではなく相手のしゃべるにまかせた会話とから情報を得ることに努めた。

その他、彼らの受け入れ方、調査に対する態度、質問に対する答え方などいろいろの困難があるが、ともかく、19世紀にソマリ族の調査をした学者が、「無知な原住民はマラリアが蚊にかまれて生じると信じている」と書いたような誤りだけはしたくないと思ひ、できるだけ彼らの思考の仕方をそのままこちらが受け入れるよう努力している。

残された期間は、前半が passive な調査とでも名づけられるのに対し、active な調査を目標とし、積極的なインタビューを試みたい。すでに12月にインタビュー票を作製したので、これによって各夫婦家族毎にインタビューを行なつて、ある程度の統計を得たい。これは統計を得るのが目的ではなく、数字に示された結果と彼ら自身の意識的な考え方の相違が見たいからである。

(1966月2月)